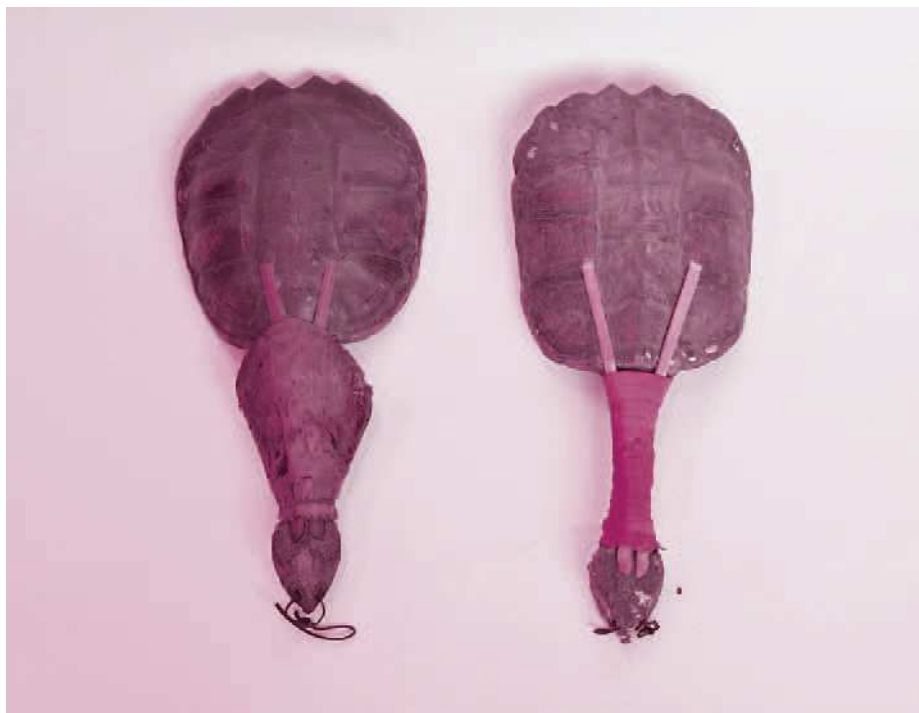




北方民族博物館だより

No. 102



(左)H3.22 カミツキガメ製ガラガラ/イロクォイインディアン/カナダ/1900年頃
(右)D23.1.45 カミツキガメ製ガラガラ/イロクォイインディアン (オノンダーガ)/
五大湖周辺/1965年収集

カミツキガメ製のガラガラはイロクォイの音楽や儀礼に重要な楽器である。

カミツキガメはアメリカ合衆国東部から中央部にかけて生息する淡水性のカメであり、乾燥させたカミツキガメの体内に、小石やトウモロコシをいれて、首を取手にして振ることによって音を鳴らす。これらのガラガラは主に治療を目的とした儀礼で使われてきた。

目次 Contents

- 1 表紙 カミツキガメ製ガラガラ
- 2-3 第31回特別展「北からの文化の波 北海道の旧石器からオホーツク文化まで」
／講座「人類の進化と北方への進出 考古学の証拠から」
- 4 講座「北アメリカの先史文化の誕生と北海道の旧石器文化」
／ロビー展「サハ共和国からのおくりもの 針生幸子寄贈コレクションより」
- 5 講座「ロシア語通訳の30年」
／講座「アイヌの人たちの歴史・文化に関する授業実践」
- 6 INFORMATION

第31回特別展

北からの文化の波 北海道の旧石器から オホーツク文化まで

2016. 7. 16～10. 16

先史時代の北海道は、後期旧石器時代、縄文時代早期、オホーツク文化期の3時期に北方の文化の影響を強く受けたと考えられます。

後期旧石器時代にはシベリアから「石刃技法」・「細石刃技法」(18,000～14,000年前)と呼ばれる石器づくりの方法、縄文時代早期にはアムール川流域・サハリンから特徴的な鏃をもつ「石刃鏃文化」(7,500～7,000年前)、そして、本州の古墳時代にあたる時期には、サハリンから海にたよる暮らしを営んだ「オホーツク文化」(5～12世紀)が北海道に波及してきました。

今回の特別展では、北海道・サハリン・千島列島から出土した資料の展示を通じて、北から影響を受けた北海道の先史文化について紹介しました。

第1の文化の波：後期旧石器時代の石刃・細石刃技法

石器が主な道具であった石器時代の中で、もっとも古い段階を「旧石器時代」といいます。この時代、人びとは土器をもたず、移動しながら狩りや採集の生活をしていたと考えられます。旧石器時代の中でも、私たち現生人類とかがわが深い時代が、後期旧石器時代(約4万～1万年前)です。

無人の地であった北海道に、後期旧石器時代の人びとはじめてやってきたのは、およそ3万年前のことと考えられます。当時は、約165万年前から1万年前まで続いた、地球規模の寒冷期の終わり頃、最終氷期(約11万～1万年前)と呼ばれる時期にあたります。

北方の旧石器文化が、本格的に北海道に広がるようになったのは、約1万8000年～1万4000年前のことです。この文化には、特徴的な石器製作技法である「石刃技法」と「細石刃技法」がみられました。

石刃技法は、石器の素材となる原石を割りやすい形に整え、細長い石のかけらである石刃を連続的に割り取っていく技法です。同じ大きさの石のかけらを、効率よくたくさん作り出すことができる、画期的な技法でした。石刃の大きさは、長さ10～20cm、幅2～3cmです。作られた石刃は、ヤリの先につける石器や、スクレイパー(搔器・削器)と呼ば



細石刃核 置戸遺跡群(所蔵：北海道大学)

ばれる皮なめし用の石器などに加工されました。石刃が割り取られたあとの素材の石は、石核と呼ばれます。

細石刃(長さ2～5cm、幅3～5mm)は石刃の小さなもので、細石刃技法は、細石刃を効率よく連続的に作り出す技法のことです。細石刃は、槍先となる骨や角に溝を彫って並べてはめ込み、<植刃器>として使われることもありました。



植刃器模型 関口昌和氏製作

北海道の後期旧石器時代の遺跡からは、本州よりも大量の石器が出土します。これは、石刃・細石刃技法が北から伝わった後、黒曜石などの石材環境に恵まれた北海道で、石器製作が盛んに行われたためと考えられます。

今回の展示では、北海道大学所蔵の置戸町置戸遺跡群出土の旧石器を多数紹介したほか、関口昌和氏製作の植刃器模型を参考展示しました。

第2の文化の波：縄文時代早期の石刃鏃文化

地球規模の寒冷期が終わる約1万2000年前～9000年前までの時期に、北海道は後期旧石器時代の終末期を迎えました。この時期は本州の縄文時代草創期にあたりますが、北海道では旧石器文化が続いていました。

約9000～8000年前になると、北海道も現在とほぼ同じ気候になり、森林の形成などが進みました。新たな環境のもとで狩りや漁、採集による定住生活が営まれ、大きな集落がつくられるようになりました。これが縄文時代のはじまりです。

約9000～6000年前は、縄文時代の早期と言われていいます。早期中頃から終わり頃のおおよそ7500～7000年前に、北から第2の文化の波である「石刃鏃文化」がやってきました。

石刃鏃は、石刃技法によって作られた石刃から作られた鏃と考えられます。この特異な石鏃をもつ文化を「石刃鏃文化」と呼んでいます。石刃鏃文化の遺跡は、北海道と本州北端にみられます。道内では、北部・東部・中央部に遺跡がみられ、沿岸と内陸に立地する遺跡があります。

石刃鏃文化の遺跡は、アムール川流域やサハリンなど、ユーラシア北東部にも分布しています。これらの遺跡の年



石刃鏃 湧別市川遺跡(所蔵：北海道大学)

代は、約1万年前～6000年前までと、北海道の石刃鎌文化の500年間に比べ幅があります。ユーラシア北東部の石刃鎌文化がサハリンを経由し、北海道へ波及したと考えられています。

今回の展示では、大空町所蔵の豊里石刃遺跡の石刃鎌と北海道大学所蔵の湧別町湧別市川遺跡の石刃鎌、石刃核、石斧などを紹介しました。

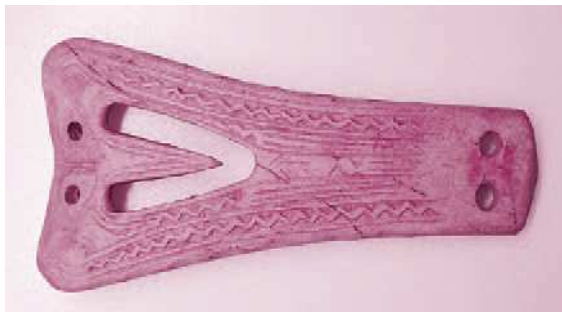
第3の文化の波：オホーツク文化

オホーツク文化は、十和田式土器、刻文土器の時期（5～7世紀）に、サハリンから北海道北部、東部、そして千島列島までのオホーツク海沿岸とその周辺に展開しました。

オホーツク文化の大きな特徴は、海獣の狩りや漁といった、海の資源に大きくたよる生活を営んでいた点にあります。今回の展示でも、骨や角で精巧に作られた鉤頭や釣り針の軸などを展示しました。

北海道に伝わったオホーツク文化は、8～9世紀頃に北海道独自の発展をみせました。特に骨角歯牙製品の製作には目を見張るものがあります。今回は代表的な資料として、礼文町浜中2遺跡のマッコウクジラ歯製人像、浜中2遺跡・網走市モヨロ貝塚の鹿角製バックルと精密な同心円文や幾何学文が施された有孔円盤などを展示しました。

オホーツク文化は、北海道北部では9世紀頃から、東部では10世紀頃から変容しはじめ、12世紀頃に終末を迎えました。



鹿角製バックル モヨロ貝塚（所蔵：北海道大学）

北からの文化の波と北海道の先史文化

後期旧石器時代に伝わった石刃・細石刃技法は、北海道の豊かな石材環境のもとで、多くの遺跡を残しました。

縄文早期に北海道に流入した石刃鎌文化は、北海道中央部・北部・東部の内陸・沿岸部に広く展開しました。

サハリンから、続縄文時代の北海道へと及んだオホーツク文化は、オホーツク海沿岸を中心に展開し、やがて独自の発展をとげました。

北から先史時代の北海道へ伝わった3つの文化は、いずれも北海道のなかに浸透し、独自の発展をみせました。北海道の先史文化は、北からの文化の波を受けながら、形作られていったのです。

最後になりましたが、本特別展の開催に多大な御協力をいただきました諸機関、みなさまに厚く御礼申し上げます。

（学芸グループ 種石 悠）

講座

人類の進化と北方への進出 考古学の証拠から

2016. 7. 16

講師 長沼 正樹氏

（北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授）

「人間とは何か?」。長沼正樹氏の講座はこのような問いかけからはじまりました。



長沼 正樹氏

人間は直立二足歩行をはじめた結果、自由になった両手で作った道具を使うようになりました。脳の大型化にも影響を与えた可能性があるといえます。しかし、難産、腰痛、痔疾などの代償を支払うことになりました。

現在判明している最古の人類化石は、アフリカ東部で発見されました。約600万～700万年前のものと考えられます。それ以降も、約20種類の人類が現れては絶滅し、現生人類以外の人類は全て絶滅しました。

最古の石器は、約260万年前にアフリカで猿人が用いていたものです。猿人はアフリカを出ることがありませんでした。約180万～7万年前にはホモ・エレクトス（初期ヒト属）と呼ばれるヒトが、ヨーロッパからインド、東アジアまで拡散しました。しかし、海を渡ることや寒冷地への進出はできなかったようです。ホモ・エレクトスも石器を用いていました。

約30万～3万年前には、寒冷地に適応した体をもつネアンデルタール人がヨーロッパを中心に広がり、約3万年前に絶滅しました。

約16万年前にアフリカに現れた私たちホモ・サピエンスは、北方の寒冷地も含め世界中に拡散しました。それまでの人類にみられない、彫像、装飾品、楽器、洞窟壁画の製作を盛んに行いました。これは「現代人的行動」と呼ばれます。

約4～3万年前には、ロシア平原やシベリアなどの寒冷地へも進出しました。長沼氏は、北方進出の理由のひとつに、ホモ・サピエンスの持つ情報ネットワークを挙げます。ヨーロッパからシベリアにマンモス牙製ビーナス像（2万8000～2万2000年前）が広く分布することがその理由です。

また、シベリアのマリタ遺跡から出土した約3～2万年前の骨製の針は防寒具を作った証拠であり、マンモスの牙や骨を道具や家に利用した例もいくつかの遺跡で見られるといえます。2～1万年前にシベリアから日本列島、アラスカまで広く分布した細石刃石器も、軽量で原石を節約でき、寒冷地で動物を追う移動生活を支えた道具だったと考えられます。さまざまな工夫をして、人類は寒冷地へ適応していったのです。

（学芸グループ 種石 悠）

講座

北アメリカの先史文化の誕生と
北海道の旧石器文化

2016. 8. 20

講師 中沢 祐一氏（北海道大学医学研究科助教）

アメリカでの研究歴をもつ中沢祐一氏に、いつどのようなルートでアメリカ大陸に人類が来たのか、現在のアメリカ先住民との関連はあるのか、などの点について、考古資料、遺伝情報、言語、古人骨の証拠から解説いただきました。長沼氏の講座を引き継ぐ内容となりました。

北海道を含む、北東アジアの後期旧石器時代（4万～1万1,000年前）の石器の内容の説明後、アジアからアメリカ大陸への人類の進出について解説いただきました。

ベーリング海峡は当時、氷河期で陸橋となっていました。この陸橋はベーリングアと呼ばれ、このベーリングアを通過して1万4,000年前に人類は北アメリカに入ったと考えられます。北アメリカに入った人類は、その後きわめて速く南米まで到達しました。どのようにアメリカ大陸を南下したのでしょうか。

当時、北アメリカ大陸の北側には氷河が広がり、南下の障害となっていました。しかし、1万4,000年前に氷河の一部が融け、南へのルートである「無氷回廊」が現れました。この無氷回廊を通ったとする説、あるいは海岸ルートをボートで南下したとする説が有力といえます。

最初にアメリカに移住した人びとは「パレオインディアン」と呼ばれます。特徴的な狩猟用の石槍を持っていたことがわかっています。石槍の違いから、クローヴィス文化とフォルサム文化の2時期に分けられています。この石槍でマンモスやマストドン、バイソンなどの氷河期の大型獣を狩っていました。クローヴィス文化の墓から、男児のDNAを抽出して調べたところ、アメリカ先住民の遺伝子と共通することがわかりました。この男児は、アメリカ先住民の祖先だったのです。

なお、言語学者のグリーンバークは、異なる時期に3段階に分かれてアメリカ大陸への移住があったとする説を唱えています。また、遺伝人類学からは同じ集団が時期を違えて移住した可能性が示されています。

アメリカ大陸への最初の移住について、解明が進んでいますが、課題もあるようです。北東アジアから北アメリカへの移住の過程や、北海道で旧石器文化を残した人びととベーリングアを渡った人びとの関係など、いまだに研究の余地があるといえます。

(学芸グループ 種石 悠)



中沢 祐一氏

ロビー展

サハ共和国からのおくりもの
針生幸子寄贈コレクションより

2016. 5. 21-7. 3

ロシア語通訳として活動されてきた針生幸子さんより、平成21年、ロシア連邦サハ共和国の民族資料300点余りが寄贈されました。これらの資料は、針生さんとサハ共和国の人びととの30年にわたる交流のなかで、現地の方から贈られたり、お土産として購入したりされたもので、工芸品、アクセサリー、衣類、絵はがき、図書など多岐にわたります。本ロビー展では、その後改めて針生さんから寄贈された資料を含む約350点の「針生コレクション」の一部（108点）を展示しました。

シベリア東部に位置するサハ共和国はロシア連邦内の共和国で、ロシア人のほか、サハ、エベンキ、エベンなどの北方諸民族が暮らしています。金やダイヤモンド、石炭、石油、天然ガスなどの地下資源に恵まれ、マンモスの化石が出土することでも知られています。また、タイガと呼ばれる北方針葉樹林帯に覆われ、樹木や野生動物も豊富です。展示の前半では、こうしたサハ共和国の地下資源や自然にちなんだ工芸品、鉱物標本、白樺樹皮製容器、毛皮製の人形などを展示しました。

展示の後半では、サハ共和国の主要な民族であるサハの文化を中心に、伝統文化を象徴する存在のウマに関する工芸品、夏の大切な飲み物である馬乳酒「クミス」用の木製杯「チョローン」、銀製の胸飾りやイヤリング、国民的楽器「ホムス」（口琴）などを紹介しました。

また、このロビー展のために、針生さんの友人でサハ共和国在住の写真家ビョートル・オコネシニコフ氏から、サハ共和国の風景や人びとを撮影した写真が提供されました。

工芸品、お土産品には、その土地の環境や人びとの生活が反映されています。本展を通じて、サハ共和国の自然や民族文化に親しみを感じていただけたのではないかと思います。



会場の様子

(学芸グループ 中田 篤)

講座

ロシア語通訳の30年

2016. 6. 18

講師 針生 幸子氏（ロシア語通訳）

ロビー展「サハ共和国からのおくりもの」の関連事業として、展示資料を寄贈いただいた針生幸子さんにロシア語通訳としての活動やサハ共和国の人びととの交流についてお話しいただく講座を開催しました。



講師の針生幸子氏

中国・大連でお生まれになった針生さんは、敗戦後の若い時代に旧ソ連軍少佐の家庭で家政婦として働いたのがきっかけでロシア語に親しむようになったそうです。

日本に引き揚げ後、せっかく覚えたロシア語を忘れまいと独学で勉強を続け、1972年の札幌オリンピックの際に初めてロシア語通訳として採用され、選手村で通訳の仕事をするようになったとのこと。

その後、観光やスポーツ大会のために来日するロシア人や、1980年代後半からは治療のために札幌を訪れたロシア人の通訳なども務められるようになりました。

1986年に札幌で開催された展示会でヤクート自治共和国（のちのサハ共和国）訪問団の通訳を担当したのをきっかけに、サハの人びととの交流が始まりました。その後も札幌を訪れたサハの観光団の通訳をしたり、逆に北海道の合唱団がサハ共和国で公演する際に随行したりする機会があり、サハの人びととの交流が深まっていったそうです。

以降、サハの友人からの招待や文化交流などで何度もサハ共和国を訪れ、田舎町に立ち寄ったり、サハの伝統文化、お祭りや民族衣装、料理などを楽しんだりしてきました。最近はサハ共和国を訪れることはなくなってしまったとのことですが、サハからの訪問者が来札した際には通訳や案内役を務めるなど、サハの人びととの交流は現在に至るまで続いているとのこと。

30年にわたる交流を語っていただくには講座の時間は短かく、予定時間を少し過ぎてしまいましたが、まだまだお話は尽きない様子でした。

(学芸グループ 中田 篤)

講座

アイヌの人たちの
歴史・文化に関する授業実践

2016. 8. 4

北方民族博物館では、毎年夏休み期間中に教員向けの講座を開催しています。今年も網走地方教育研修センターとの共催により、学校の授業でアイヌの歴史や文化を教えるための研修会として、本講座を企画しました。今年は道東各地から小学校教員11名が参加されました。

本講座では、最初に当館研究協力員の渡部裕氏より「北方民族とアイヌ文化」と題した講義をしていただきました。渡部氏の講義では、北方諸民族とアイヌとの文化的共通性や相違、歴史的な交流について紹介されました。アイヌに隣接する北太平洋沿岸の諸民族を知ることで、より広い視野でのアイヌの歴史・文化理解につなげることができました。

次に、(公財)アイヌ文化振興・研究推進機構から派遣いただいたアイヌ文化活動アドバイザーの磯部恵津子氏と時田幸恵氏の指導により、アイヌ料理を体験しました。参加者全員で協力して、チエプ オハウ（魚汁）、コンブ シト（昆布だれ団子）、アトウイナウ ラタシケ（タコとギョウジャニンニクの和え物）など6種類の料理を準備し、昼食としました。簡単に美味しくできたので、参加者からは「これなら学校でもできそう」という声が聞かれました。

昼食後、同じく磯部氏・時田氏からムックリの演奏を指導していただきました。

なかなかきれいな音が出ないと参加者は苦労していましたが、磯部氏・時田氏との会話を交えて和気藹々とした、楽しい体験となりました。

ムックリ演奏体験のようす
(右はアイヌ文化活動アドバイザーの時田氏)

ムックリ演奏の後には展示観覧をはさみ、当館学芸員・山田の進行でモデル授業A・Bを行いました。モデル授業Aでは、アイヌの歴史を教える授業で社会科副読本の『アイヌ民族：歴史と現在』（(公財)アイヌ文化振興・研究推進機構）を用いる例を紹介し、ディスカッションをしました。モデル授業Bでは、学校で入手・活用できそうな映像資料をいくつか紹介しました。

参加者の多くはすでに学校でアイヌに関する授業経験のある先生方で、その実践の難しさを直に感じておられるようでした。参加者アンケートでは、本講座で知ったことや教材として活用できそうなもの、資料活用のヒントをたくさん知ることができて良かった、などの感想が寄せられました。昨年から継続して参加された方も多かったことから、来年企画する際も継続参加を見込み、より新しい情報を先生方に提供したいと考えています。

(学芸グループ 山田 祥子)

第31回 北方民族文化シンポジウム 網走「環北太平洋地域の伝統と文化：1 サハリン」

北太平洋を取り囲む地域は、自然環境や生物資源だけでなく、文化的にも類似性や共通性が指摘されてきました。本シンポジウムでは、環北太平洋沿岸の地域ごとに先住民文化の特徴や変遷、現状を総合的・学際的に比較・検討します。今回は、対象地域としてサハリンを取り上げます。

◇シンポジウム【参加無料】

■日程：平成28年10月15日(土)・16日(日) 各日9:00～16:00

■会場：オホーツク・文化交流センター(エコーセンター2000) 大会議室[網走市北2西3/TEL.0152-43-3704]

■発表者：E. グルズジェワ氏(ヘルシンキ大学)、I. サマーリン氏(サハリン州郷土博物館)、A. ヴァシリエフスキー(サハリン国立大学)、V. グリシェンコ(サハリン国立大学)、熊木俊朗氏(東京大学)、福田正宏氏(九州大学)、中村和之氏(函館工業高等専門学校)、麓慎一氏(新潟大学)、田村将人氏(東京国立博物館)、山田祥子(当館)

◇関連事業：馬頭琴コンサート

■日程 平成28年10月6日(木) 18:00 開場

■会場 オホーツク・文化交流センター(エコーセンター2000) エコーホール

■出演 ヨンドン・ネルグイ、アマスレン・ドルジバラム

ロビー展 北で編まれるバスケット

■会期：平成28年10月29日(土)～11月27日(日)

■会場：北方民族博物館ロビー

■観覧：無料

南のイメージの強いバスケット(かご)ですが、北方民族もバスケットを利用してきました。樹皮や木の根、草などの素材から編まれたバスケットは、生活のさまざまな場面で活躍しています。本ロビー展では、北方民族博物館が所蔵する多彩なバスケットを紹介します。

INFORMATION

行事報告

◆6月4日(土)、はくぶつかんクラブ「手作りバターと簡単チーズ」(講師：菅原章子解説員)を開催しました。

◆6月5日(日)、講座「ミルクと北方民族」(講師：中田篤主任学芸員)を開催しました。

◆6月11日(土)、講座「ウイльтаのことばと歌」(講師：山田祥子学芸員)を開催しました。

◆6月26日(日)、「ユハンヌス・夏至祭り」を開催しました。



ユハンヌスに出演いただいた
レイアロハフラの皆様

◆7月2日(土)、講座「大きな国ができるまで—ロシア・カナダの毛皮交易と北方先住民の歴史—」(講師：野口泰弥学芸員)を開催しました。

◆7月18日(月・祝)、「バイダルカ試乗体験」を開催しました。



バイダルカに試乗する参加者

◆7月23日(土)、はくぶつかんクラブ「フェルトで作るゲル型小物入れ」(講師：石原生久代解説員)を開催しました。

◆7月24日(日)、講座「オホーツク文化の骨角製品と展示解説」(講師：種石悠学芸員)を開催しました。

◆7月30日(土)、はくぶつかんクラブ「土器作り」(講師：菅原章子解説員)を開催しました。

◆8月6日(土)、はくぶつかんクラブ「考古学入門シリーズ 縄文土器の文様づくり」(講師：種石悠学芸員)を開催しました。

受賞報告

◆7月28日(木)当館館長の岡田淳子が北海道民族学会2015年度特別賞を受賞しました。

北方民族博物館だより
No. 102

平成28(2016)年9月23日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会